

札幌市市民活動サポートセンター運営協議会
令和 6 年度第 2 回実施概要

1 日 時

令和 7 年 3 月 5 日（水）18：00～20：00

2 会 場

札幌エルプラザ公共 4 施設 2 階 会議室 1・2

3 出席者

- (1) 委 員：岩本 隆 委員（特定非営利活動法人 猫の手さっぽろ）
熊崎 梨絵 委員（一般社団法人終活マイライフ）
今野 佑一郎 委員（NPO のための弁護士ネットワーク）
都築 仁美 委員（さっぽろパブリックサポートネットワーク）
松田 剛史 委員（藤女子大学人間生活学部）
水口 綾香 委員（特定非営利活動法人防災したっけ）
川村 満 委員（札幌市市民文化局市民自治推進室市民活動促進担当課）
五十嵐 健二 委員（札幌エルプラザ公共 4 施設館長）
- (2) 事務局：高坂 美江 （市民活動担当課長）
上杉 直洋 （札幌市市民活動サポートセンター）
木下 涼美 （札幌市市民活動サポートセンター）

4 会議次第

- (1) 開会
(2) 議事 ・運営および施設利用状況について（令和 6 年度報告）
・令和 7 年度事業計画について
(3) 意見交換 「スタートアップ支援事業出張講座のプログラムについて」
(4) 閉会

5 議事概要

- (1) 運営および施設利用状況について（令和 6 年度報告）

利用人数、登録団体数ともにコロナ禍前の水準には回復しておらず、オンラインでの打ち合わせ増加が要因と考えられる中、「しみさぽマルシェ」は新規・リピーター団体が多く出展し盛況、「NPO インターンシップ」では参加学生の継続的な NPO との関わりが見られたため、今後は市民活動団体との連携を強化し市民活動の活性化を図るとともに、各事業の目標設定を再検討する必要がある。

(2) 令和7年度事業計画について

スタートアップ支援事業として大学や高校での出張講座を強化する予定であり、「しみさぼフローサロン」は年間スケジュールを広報して交流や仲間づくりを促進し、「しみさぼマルシェ」は複数回開催を検討して市民活動団体の発表の場を提供するが、これまでの出張講座はNPOの基礎的な情報提供と簡単なワークショップが中心であったため、次年度以降はプログラムを充実させパッケージ化することで学校のニーズに応え、若者にNPOという選択肢を知ってもらい活動の担い手を増やしたい。

委員からの質問・意見

(委員) 高校での非常勤講師の経験から、高校の授業時間(50分)に合わせたプログラムを作成し、時間割変更の必要がなく実施しやすく、実践者の話を聞く機会やインターンシップ経験者の参加を提供することで、同世代の話が響きやすく効果的である一方で、実践者の参加に伴う費用を明確にしておくことが望ましいと考えらるが、これらの点についてどのように考えるか？

(事務局) 高校の授業1コマ50分に合わせたプログラム作成や、実践者の話を聞く機会の提供といったご意見は、プログラムに取り入れやすいと考える。実践者を毎回呼ぶのは難しいかもしれないが、動画の活用も効果的であり、その際の参加費用の問題も動画で代替できる可能性がある。

(委員) 高校生への講演経験から、教員が知らない社会課題は生徒に選択肢として与えられていないと感じており、学生の活動が内輪完結型になっているため、地域課題の解決に貢献できる仕組みが必要だと考えられるが、NPOの活動を学校に紹介し地域課題の解決につなげていくためには、企業の方が生徒の興味を引くのが上手いという現状を踏まえつつ、経済活動が地域課題を解決しているかという根本的な視点も考慮に入れる必要はないだろうか？

(事務局) 学生からは自身の経験値しか出てこず、教員が何も与えない状態では活動の幅が狭まってしまうため、こちらから社会課題の解決方法として市民活動の存在を提示し、学生にきっかけを与えることが重要だと考える。

(委員) 実施前の打ち合わせで先生側の市民活動への関心を引き出し、先生に話してもらう時間を設けたり、クラブ活動を例に挙げたりすることで、環境保護などの大きな話ではなく、生活に根差した身近な活動のビジョンを示すことが重要だと思うが、これらの点についてどう考えているか？

(事務局) 高校生や中学生といった低年齢層を対象とする場合、こちらが準備した材料をそのまま提供するだけでは、自分自身の活動として認識されにくい可能性があるため、既存の活動に市民活動の要素をプラスアルファする形で提案し、先生方が授業に取り入れたいと思えるような興味を引く工夫や、特別活動や探究的な学習のカリキュラムとしてNPOや市民活動団体と連携したタスク解決型の学習を提案していくことが重要だと考える。

- (委員) 小中学校でのキャリア教育や道德の時間において、NPO だけでなく市民活動での生き方や在り方を示すことは非常に重要であり、普段触れる大人とは違う価値観に触れる機会を提供し、既存の活動に市民活動の要素をプラスアルファすることで理解を深めることが有効だと考えられるが、先生方が授業に取り入れたいと思えるような興味を引く工夫や、特別活動や探究的な学習のカリキュラムとして NPO や市民活動団体と連携したタスク解決型の学習を提案していくことについてどう考えているか？
- (事務局) 中学校の総合学習の時間や、高校で市民活動に力を入れている学校を入り口として、そこに深く関わることで、市民活動サポートセンターの取り組みが口コミで広がるのが良いと考えられる。
- (委員) 学校側との連携は必要ですが、すぐに無理でも、特別活動や道德の時間とどのように連携していくか、時間をかけて検討していくべきではないだろうか？
- (事務局) 札幌市外の学校への展開については、札幌市外からの通学圏内であれば対象を広げても良いと考えているが、現段階ではまず札幌圏内を優先し、その上で今後の展開を検討していきたい。
- (委員) 委員の皆様からの様々な意見を踏まえ、しみサポが出張講座を行う目的やゴールはどこにあり、インターンシップへの参加を促すことなのか、それとも市民活動を子どもたちに知ってもらいたいことなのか、また、中学校、高校、大学といった対象別に異なる目的設定について、しみサポがこの事業を行う意味は何だと考えられるか？
- (事務局) これまでの出張講座は事業の広報が中心で、より深く知りたい方には NPO インターンシップを勧める形だったが、今後は 10 分程度の話と簡単なワークを通じて、社会課題を解決する手段として市民活動という選択肢を若い世代に提示し、その選択肢を持ってもらうことをゴールに転換したいと考えている。
- (委員) こういう話を現役のときに聞きたかった。中学校の総合的な学習や高校の探究的な学習において、生徒が将来何をしたいかというところまで深く掘り下げ、市民活動がその選択肢の一つとしてあることに特化して話すことは非常に有益だと考えるが、学校が民間団体を招いて様々な選択肢を提示する機会を作る際に、NPO が学校の担当の先生と綿密な打ち合わせを行い、50 分という限られた授業時間で効果的なプログラムを提供するためには、具体的にどのような工夫が必要だと考えるか？
- (事務局) 市民活動を単発の講座で子どもたちに落とし込むことは難しいため、継続的な取り組みにすることが望ましく、カリキュラム化は未定ながらも、まずは出張講座のプログラムをきちんと整備し、学校に働きかけて取り込んでもらうという着実なステップを踏んでいきたいと考えている。

以上